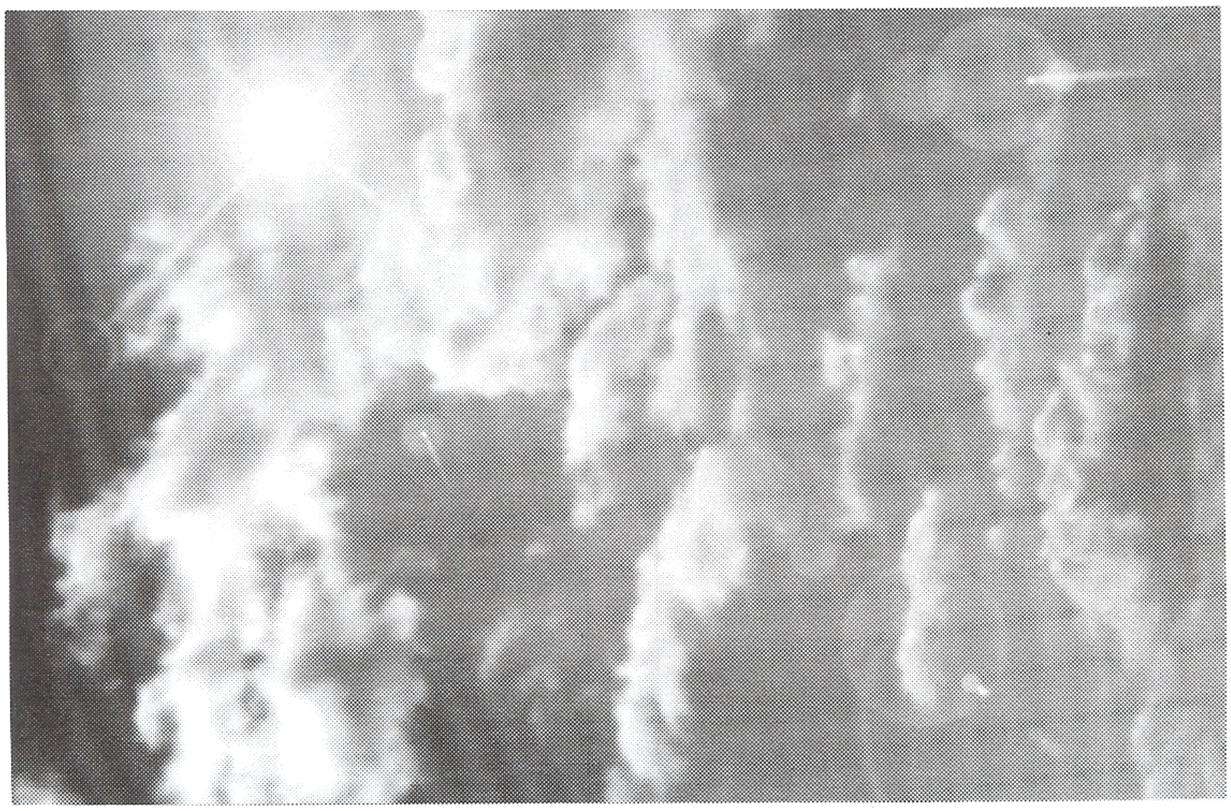


…ボクらの学園祭は今日終了

はじめに

『哲樂の中庭』（てつがくのなかにわ）は、居合わせた人どうしが語り、考えることを楽しむ空間を意味しています。現実の場としてばかりでなく、仮想の、またはイメージ上の空間も含めて。

『哲樂の中庭』は、リーズの新しいプロジェクトの企画『知性のむこうに感性がある　哲樂の中庭』として三年を期限に生まれました。九八年四月のことです。当初は事務所内に実際の場、サロンを設けて、九九年一月以降はネットや個別的な面談を通じて、その時、その場の機会を『哲樂の中庭』と捉えて、たくさんの人たちと自由で、気のおもむくままの対話を楽しんできました。

『哲樂の中庭』の発想は、パーソナル・アシスタントと相通じるものがあります。どちらも、人と人がコミュニケーションを通じて働きかけあうという点で。パーソナル・アシスタントはコンサルティング・サービスの提供方法に関する独自の考えと方法です。十年前に考えたこのコンセプトが最近少し受容されだしたのは幸いです。このパーソナル・アシスタントについては、引続き、別にまとめていきたいと考えています。

『哲樂の中庭』の以前から、パーソナル・アシスタントの事業を始める前から、人が人の可能性を拓くという考え、というより感覚として、当たり前にもっていました。なぜだろうと思いますが、そこにはやはり、わたし自身が、人との出会いとコミュニケーション、そして何らかの働きかけ

がありました。それが、わたしをつくったと言えるわけです。

これからも『哲樂の中庭』にこめた精神は変わりませんが、二〇〇一年三月がプロジェクトの期限であったので、ひとつの節目として、この小冊子を作りました。構成は次のようにしました。

まず序章で「出会いの妙」について書きました。人と人が語るということはまず出会いがあればこそですから。

第一章は「現在」として、「現在」に出会った人たちとの対話から、あらためて考えたことや新しい発見と思えることについて書きます。

第二章は、「過去」です。「現在」によって「過去」が際立ちました。「過去」が「現在」につながっていることを見つめたいと思います。

第三章は「未来」です。「現在」を自覚したことは、「未来」の訪れを予感したことでもあります。「未来」は「過去」をよりよく生きること。そんな風に感じる今、『哲樂』がすごく大事と思っています。そこで、過去から漠然と自分の考えの中にあることを、言葉においていてみます。

終わりの章では、『哲樂の中庭』が豊かさを見つめる、見つめなおす機会になるというあたりを、考えるままに書きます。

それぞれの章を、そう、太陽の匂いのする夏の風に吹かれながら、小さな中庭で、あなたと哲樂するように、進めていきたいと思います。

じゃ、中庭へ一緒に入りましょうか。

もくじ

はじめに……1
序章　哲樂の中庭
　出会いの妙……4
第一章　「現在」
　時間……7
　目ききき、耳ききき……10
　文化……14
　生と働……20
第二章　「過去」
　原点……22
　記憶の情景……24
第三章　「未来」
　〈文化の続き〉日本の潜在力とこれから……26
　「過去」の未来化……32
終章　豊かさ
　知の周縁……34
おわりに……37
（付）
リーズレター99年6月号『旅は終わりに近づいて』

序章　哲樂の中庭

出会いの妙

日経新聞の最終ページに「私の履歴書」があります。これを読んでいると、人の履歴書は、人との出会いの履歴だと思います。

出会いというのは本当に不思議なものだと思いますね。「パーソナル・アシスタントって何？」と言われながら今年で十年。九一年の三月に自分で仕事を始める後おしになったのも、人との出会いとその人の発した言葉でしたもの。

一九九〇年晩夏

朝の通勤時。会社へ向うバスの中。バスは肥後橋のホテルの前で信号待ちをした。つり革に手をかけ、目の前をボーと見ていた。ちょうどホテルの正面玄関だった。中から中年の男性が出てきた。闊達な感じの男性だった。その服装、雰囲気からサラリーマンではない。経営者か、自由業か。ともかく、時間も、仕事も自分でコントロールできる立場を印象つけた。その時唐突に思った。

〝わたしは向う側にいかなければいけない〟

この時ほとんど決めてしまった、もう会社をやめて自分で何かすることを。当時勤めていた会社は、入社してほんの数ヵ月しか立っていなかったのに。そして、思い出したのです、この会社に入る前年の一年間通った学校のニュージランド人ジャーナリストの「発語」、

『どうして自分でマネジメントすることを考えないの？』

外資転職のための社会人向コースのある科目を担当していた彼が、就職することばかり言う受講生に向かって、いかにも不思議そうに言った言葉です。その時は反発さえ感じたこの言葉が、ほとんど忘れていたこの「発語」が、記憶の底から浮き上がってきたのです。

出会いが妙と思う一つは、こういうことです。ニュージーランド人のジャーナリストも、ホテルから出てきた彼も、わたしの人生に決定的なシーンと言葉を与えているとは、思っていない。自分の知らないところで誰かの人生を左右する出来事に参加しているなんて、まったく思いもよらないわけです。

長い時間をおいて過去の言葉が人生の新しいアプローチを後押しすることもあれば、予告的な場合もあります。年の功の成せるワザというか、時々、相手の将来を予言するようなことを言う年長者に出会ったことはありませんか。はっきりとした何かについてではないのだけど、例えば、20才ぐらいだったか、先の進路について聞かれ、たぶん平凡に生きていくと思いますと答えると、「いや、そうはならない、何かきっとする」と、こちらの顔をまじまじと見ながら言った人がいます。

何を言っているのかなと思いました、この時は。ただ、その怪訝な気持と、言葉は記憶に残っています。でも忘れていたました、ずっと。10年前に自分で仕事を始めて、思い出したのです。あの時、年長者の目には、わたしの中に何かをしそうな芽が見えたのでしょう。自分自身、年を重ねて、はっきりいえば、年をとって、（でもわたしの年齢は謎になっているようなので、公表しないことにして）、たしかに少し見えますね、若い人の中に違いが。

まるで「未来からの要請」（『大人のためのわかる数学―数理哲学序説』「四方義啓　高等研」にこの言葉をみつけ、はっきりした目標がないままやってきたことが、この言葉にあてはめるとすごく納得できる気がしたものです）のように、誰かが自分のために「発語」する。その時は気にとめる程度なのに、うんと時間をおいて、つまり未来の現在に、ありありと現実味をおびてくる。出会いとそれに伴って発せられた言葉が、時空を超えて、意識に響く。なんという妙味でしょう。

第一章　「現在」

時間

時間のことをよく考えます。むしろ考えさせられるという方が正しい。気がつけば、〃人生の折りかえし点はとうにすぎていた〃というぐらい、年をとってきたのですから。過去がたくさんできたのですね。自然に時間の流れや、〃どうしてあの時、あの人と出会ったのだろう〃と、わたしと他の人との時間の交差に思いをはせます。

そういう自分の生の時間をもっと長い歴史上においてみると、ほんの点のようなものです。歴史の上での人間一人の生涯は、ほんの点のようなものですが、その点に顕微鏡を近づけてみると、たくさんの人間の喜怒哀楽に満ちた日常の営みがあるのだと、あらためて思います。最近江戸時代の離縁にかかわる文書が見つかり、女性からの三行半もけっこうあったようだという記事をみて、いつの時代も逞しく生きる女たちが、（もちろん男たちも）、いたのだとつくづく納得しました。

さまざまな女、男たちが生まれて、自分の時間を生きていく。そこに出会いがあり、別れがある。その出会いがおもしろいわけです。それぞれがこの世に誕生した時間は違います。まったく同じ人はいないでしょう、数秒かは違うはずです。そう考えると違う時間で歩み始めた人それぞれが、どこかで誰かと交差するというのは、ある程度、用意されたものではないかと思えます。

念のためことわっておきますが、ここに書くすべては、自分の考えていることや感じていることを表わしているだけです。今の知的レベルがそのまま出ますが、それさえも、誰かの働きかえになるかもしれないと想像するからです。モンテーニュに励まされる、わたしの「試し（エセー）」です。

話を交差の戻すと、出会いが用意されたものだとしても、行きずりの出会いもあれば、深くかかわりその人の生に抑揚をつける出会いもある。その抑揚が時に、「節目」というような、時間の区切りを感じさせます。

ただ、「節目」は、後になって気づくもので、その真っ只中（人の出会いと出来事に深くかかわっている）時はその対応に意識が向かっていて、わからないものです。それが一段落して、≪そうだったんだ≫と思う。例えば、わたしの場合は、事務所を開設した九五年四月から九九年の五月の間がまさにそういう期間でした。この冊子でいう「現在」はまさに、この期間のことです。だからこの以前が「過去」で、以降が「未来」という時間の区切りができたわけです。これを書いている今、二〇〇一年六月はすでに「未来」に入っているのです。

「節目」を感じるほど「現在」は劇的な期間でした。その一端はすでに九九年六月のリーズレターに書きました（『旅は終わりに近づいて』）ので、この冊子の最後に入れます。後で読んでください。

ところで、その劇的な「現在」ですが、何が劇的だったかというと、生きるモノサシが、自分と自分以外とではかなり違っていたということを知ったことです。社会観・感、人間観・感、コミュニケーション観・感が、

ずいぶん違うということを初めて知った。知ったということと同時に、どうして今まで知らなかったのだろうと思った。当然ですね、もういい年をしているのですから。

それにしても大変でした。とにかく、生きるモノサシが違うということは、価値基準が違うということで、価値基準はその人の精神性に根ざしていて、精神性は、創造性の根源ですから、自分のやっていることが、むなしく思えました。でも、一方で、自負も感じた。いろんな意味で「現在」が人生の大きな学習の期間であったということです。それが「節目」なのですね。

「節目」は誰にとっても遅かれ早かれ訪れることではないかと思います。先人たちが多くの人生訓やことわざを残していますが、人間は年を重ねるうちに、それまでの経験や価値観を鏡に映して見るような場面に立つのでしょう。その時の学習内容が言葉に残っている。そしてこれからもたくさんの人間が、その営みの中で、言葉を残してくれ、後世の人たちの助けをするのではないかと思います。

目きき、耳きき

社会観や人間観を見なおすほどのことを知るのは、ほとんどの場合、人との直接的な関係を通じて、知ることになると思います。人がまさに媒体になって情報を伝達してくれるわけです、良きにつけ悪しきにつけ。どちらにしても、学習の機会になりますが、願わくは、相手の知を拓くような、そんな情報を伝達してくれる人に出会いたいものです。ただし、そういう人はけっして多くありませんが。出会うことばかり期待してもだめですね。自分自身が伝達できる知性と感性を持たなければ。

そう自分に言い聞かせながら、ある人を思い出しています。仕事で知り合ったYさん。出会ってほんの2回しか話していないのに、《なんでそんなことがわかるの？》と思うような示唆と助言をさりげなく発する。それができるのは、Yさんが人の目きき、耳ききができるということと、それだけの知性と感性、そして品性を備えているということがわかるのです。

まったく余談ですが、「耳きき」という言葉は、今年の初めある人からパーソナル・アシスタントの仕事とわたしの長所短所を聞かれ、組織について、目きき、耳ききができることと答えたのです。我ながら、「耳きき」とはなかなかうまい言い方だと後で思ったのですが、どうでしょう。

Yさんからは、『旅は終わりに近づいて』にも書いていますが、ミンスキーの本を教えられ、そこから、わたしの知のある領域が拓かれました。そしてそこから、まったく別な、Yさんも思いも寄らないところで、出会

いも生まれていったのですから、Yさんの働きかけの広がりは計り知れません。仕事の関係は1年ほどで終わりましたが、ふとした時に、連絡をいれます。どういう時かというと、往々にして自分を問うている時です。そういう状態をどこかで収拾しなければいけない。そういう時に会って、話をしようと思うのです。けっして答を求めてではなくて、答えを自分で見つけるための何か「発語」をYさんから得られると思うからです。そして得られるのですね、これが。厳しい言葉で。

一九九九年四月

突然Yさんの携帯へ連絡をした。もし時間があれば、会いたいと。すると快く受けとめ、梅田で会った。会わなかった間のことを聞かれ、それに応えて、いろいろと話した。仕事のこと、この間に感じたこと、等々。それらを聞きながら、Yさんは時に、鋭い言葉をいれる。そして極め付けは、最後の方で、今後のことを聞かれた時だった。わたしが、「もっとパーソナル・アシスタントのやり方を企業に…」と言いかけたのをさえぎり、

「あのね、リーさん、リーさんはごちゃごちゃ言わなくていい。これまで通り、あいまいなまま、その時々の思うようにやっていけばいい」

ピシャリと言われ、グサリをきました。その時は、《たしかに、なんだかんだといっても、自分の思うようにしかできない》と、痛い所を突かれたと恥ずかしくなりましたが、それ以上に、Yさんはパーソナル・アシスタントという仕事の本質を見ぬいていたのかと思います。パーソナル・アシスタントのサービスの提供対象によってはまったく機能しないということを。そういえば、九六年の終わりにYさんたちと出会ったおかげで、自分のモノサシがけっして体勢でないことを知る一方で、同じように感じる人もどこかにいたということを知ったのでした。

それはともかく、Yさんのように、人の目ききき、耳ききができるだけでなく、それを相手に伝えるというところに意味があると思いませんか。だいたい、人間は、自分のことは自分が一番よく知っているというのは、あれはそうではありませんね。個人的な感覚でいうと、自分で知っている部分は六〇%ぐらい（わたしの場合はもっと低いかもしれませんが）ではないかと思います。そして人が自分に対して評するのを加えて、九〇%ぐらい。けっして一〇〇%にはならないですね、人間は毎日変化していますから。そういう自分でも気づいていない面を他者が見て、感じて、何か言ってくれれば、それをきっかけに考え、考えるための新しい情報や知を探り、これまでと違った世界に一歩足を踏み入れさせる。

相手の可能性を拓くような「発語」がYさんにできるのは、先にも書いたように、Yさんの知性と感性、そして品性によるものしょう。その品性は人に対する基本的な愛情からくるものでしょうから、厳しさもまた、相手に響くのだろうと思います。ここが大事ですね。人には相性があるか

ら、好き嫌いはある。相性という言い方は便利なものですが、好き嫌いを理屈で説明しようと思えばできなくはないですが、長くなります。だから、単純に好き嫌いでいいと思いますが、好きはともかくとして、嫌いと思えても、相手にとってよいと思う点は言葉にするのが他者としての役割でしょう、特に後輩たちに対しては。ただ最近は、若い人たちの感情の許容が狭くなっているようなので、逆恨みされかねないので、言う相手の目ききの精度も高めないといけないようですが。

文化

人の出会いが新しい知の領域を拓きっかけになることもあれば、もっと身近な、生活そのものの考え、様式などの違い、つまり文化の違いを発見することがあります。ところで、「文化」を広辞苑で調べると、次のようになっています。

文化　（「広辞苑」より）

人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ、技術、学問、芸術、道徳、宗教、政治など、生活形成の様式と内容を含む

ちなみに、「文化」と「文明」の違いは、特に西洋において、「文明」が技術的な発展のニュアンスの強い場合に使われるのに対し、「文化」は人間の精神的生活にかかわる場合に使うとあります。なるほど、よくわかりますね。「文化」の概念はまた、次の3つの要素で表わすことができます。価値観、行動規範、パラダイム（思考のクセ）。＝企業文化＝という場合、この3つを上げますね。一般にもあてはめていいと思います。

つまるところ、ある一定の人の集まりと環境に応じて、次元の異なる多種多様な文化があるわけです。国や民族ごとの文化から、家ごとの文化まで。人間が生まれて、行動の範囲が広がっていくごとに、一人の人間の中にさまざまな文化が重なっていく。当然それに応じて常識というものも養われていき、それも文化に含まれるものですね。

一人の人間の中に文化が重なっていくとはいえ、社会に一員として生きている限り、その国の価値観、行動様式から逃れることはできません。二〇ー八〇の原則をあてはめると八〇％の人はとらわれているでしょうね。わたしの場合は、幸か不幸か二〇％の属し、おまけに日本で生まれた外国人という立場が、八〇％の価値観や行動様式を認識、実感する機会に出会わなかったようです、「現在」までは。

わたしの「過去」と「現在」を分けたのは、この八〇％の文化の衝撃だったのです。

特に、俗にいう世間に対する感覚「同じが安心」によせる感覚、そしてコミュニケーションの取り方（人間関係のあり方といっていいかもしれません）について知ったことです。「日本人は世間の目を気にしながら生きている」ということは情報としてはもちろん前から知っている、一般的論として。でも身近な人たちが、世間の目を払拭しようと思っても、そう簡単に払拭できずにいるとは思いもよらなかった。わたしもまったく気にしないわけではない。でも、そんなことより個としてどう生きるかという方が大きなテーマで、そんなことを気にとめる隙間はなかったのです。

同じ意味で、「みんな同じが安心なんですよ」と言われて、なんで同じが安心になるかよくわからない。単純に考えても、他と違わなければ、同じ競争に巻き込まれるだけではないかと思う。違うことが不安だから、コミュニケーションにおいても、違った意見や、自分が言いだしっぺになることを避けるのか。相手との意見が同じにしろ、異なっているにしろ、基本的に自分の考えを伝えることが相手に対する礼儀だと考えているわたしとのギャップは大きい。

結局のところ、わたしの想像力の欠如と、多くの人が自分の意見や異なった意見をあまり明らかにしないという文化が、同じ社会にいながら、八〇％の文化に気づかずに来たのかと思うのでした。

それがわかると、なんとなく怪訝な気持ちになった過去のいつくかの場面や言葉が理解できるのでした。いつかある人から、「どうしてそんなに強く生きられるのですか？」と言われたことも、本人はまったくそんなこと思っていないのに、相手のモノサシからするとそう見えるのですね。一人一人のモノサシの違いが、ものごとの捉え方、感じ方にこんな根本的な違いを生むのですね。まさに《知性のむこうに感性がある》です。

コミュニケーションの場面でもそうです。次のような会話は普通の会話ではないと感じますか？

1997年2月末　診断士の知人と昼食での会話

相手「ところで、どう？　仕事のほうは？」
当方「う～ん、まあ、相変わらずですね。」
相手「相変わらずだったら、いいやん。順調にいっているということだから。」
当方「いや、そんなことはないですよ。いつどうなるか
わからないというのは相変わらずなんで。」
相手「それにしても、悠々自適で、羨ましいなあ～、…尊敬はできへんけど」
当方（フムと思っただけ。そして、）「○さんの場合、尊敬できる人ってどんな人ですか？」
相手「…」（考える）
当方「いませんか？」
相手「いないなあ」
当方「うむ…。でも、いないというのはあるのかな。生きるうえで、こうありたいと思う人がいるんじゃないかなあ…。」
相手「そりゃ部分的な点、例えば勉強ができるとか、そんな点で尊敬できる人はいるよ。…」（と続き、最終的に「２人ぐらいいてるかなあ」ということになった）

わたしは、この会話をおかしいとは思わないのです。人を尊敬するというのはそう簡単にできるものではないし、尊敬できるということは、自分の価値観にそって、尊敬できる点があるということで、一緒に勉強はした仲だけど、お互いのことはまったく知らないのに、尊敬できるはずはない。《尊敬できないのは、そらそうだ》という程度の感じで、聞き流し、むしろ、相手の尊敬できる人を知るということは、相手の価値観を知ることにつながるから、そこから、互いに尊敬できるかどうかをはかる出発点になるのではないかと思う。とはいえ、会話している時にそんな理屈を考えて問うているわけではありません。自然にそう思っているのです。

でもこの会話は普通の会話ではないと言われた。尊敬できないと言われて、「尊敬できる人はどんな人ですか？」なんて、普通は聞き返さないと言うのです。この指摘には驚きました、本当に。そのとがあって、その度に驚かされ、いかに自分が世間を知らずに生きてきたのかと思いましたが、ともかくよい学習をしました。だからといって、その指摘がすべてではないことも、わかったので、今こうして『哲樂の中庭』をまとめていると言えます。

ところで、コミュニケーションの取り方の違いは、人間関係のあり方の違いに表れます。人間は他人の意識を共有することはできないので、関係には、コミュニケーションが欠かせないからです。「同じが安心」を拠り所に、違いを表面化させず、葛藤を避ける関係に信頼は築けるのでしょうか。逆に根本的に異なる精神性をもっているに、同じであろうとする必要があるのでしょうか。そのリスクはあまりに大きい。なぜなら、精神性は

その人の創造性の源泉だと思いますから、それを損ねてしまう。

思えば、今につながる先のYさんとの人間関係は、仕事の途中であった行き違いを、クライアントの言い分として引き下がることをせず、自分の姿勢をはっきり伝えたことが、（当然それを受けとめるだけの度量がYさんにあって）、信頼を生んだからだと思います。もっとよくよく考えると、Yさんは受けとめてくれるという漠然として予感がわたしの方にもあったのだと思います。どうあれ、おかしいと思うことは伝えて、伝えてだめなら、それまでと思わないといけませんね。それぐらいの覚悟がないと、信頼関係には発展しないでしょう。

この「信頼」を考えるのに、『信頼の構造　こころと社会の進化ゲーム』（山岸俊男　東京大学出版会　九八年五月）はいい本です。九八年のこの時期は、ちょうど「現在」の間で、自分の中で文化の混乱が起こっている時で、信頼や誠実の自分のとらえ方と他者とのそれは違うのだろうかと思っている頃に、日経の経済図書文化賞受賞の紹介記事で知り、買った本です。ここで明らかにされる信頼がわたしのとらえる信頼と同じであることを確認したので、後は読む気をなくしたのですが、この本の中心的なメッセージが「集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊する」は、象徴的です。

生と働

この章の初めに時間についてよく考えると書きましたが、時間を考えるというのは、生きていることを考えるということでもあります。時々「趣味は何？」と聞かれますが、これがこまります。「生きていること自体が趣味のようなものですからね」というと、中には、「それいいね、いただき！」という人がいますが、大抵は、先の「尊敬でけへん」ほどではないにしろ、ノンキでいいねといった感じではないでしょうか。

生きる目的は人によって違うと思いますが、個人的には「人間らしい」を精一杯広げることと思っています。その上で、誰でもない自分を生きるということです。「人間らしい」、これはシンプルなことですね。人間は一人では生きていけないし、自分の夢は他の人たちとの係りを通じて実現されていくわけですから、人からの信頼を得られて、自分も誰かを信頼できること、お互いが関係をもつことで、お互いのプラスの働きになること。そのように思います。それを精一杯広げるというのは、ちょっとニュアンスは違うかもしれませんが、俗にいう「器の大きい人間」の、その器を広げるということではないかと思います。ただ、神様は、そう簡単に器を広げさせてくれませんね。それなりの代償をはらわなければ。

つくづくと思うのは、やはり自分で仕事をやってよかったということです。何がよかったかというと、先に書いたように、社会に対する目が開いたということ。そして社会の中での自分の存在と独自性も知ったというこ

と。たぶん、自分でことを起していなければ、知ることはできなかったろうと思います。不遜ですが、自分の成長を自覚する経験をしたと言わせていただきます。先日、ある人がわたしのホームページのある日の記述を読んで、「迫力」を感じたと感想を寄せてくれましたが、もしわたしに迫力があるとすれば、こういう自負からくるものでしょう。

パーソナル・アシスタントというやり方、およそ仕事とは関係なさそうな『哲樂の中庭』の活動、そしてホームページの運営。これらは生きる目的のところで、すべてつながっています。だから、「生きること自体が趣味のようなもの」というと同時に、そういう生き方がはたして通用するのかどうかを実験しているようなもの。だから、「実験人生」とも言えるのです。

第二章　「過去」

原点

「現在」の間にそれまで知らなかった、気づかなかったことを、人との出会いと通じて知ったわけですが、そうすると当然のように、「過去」がクローズアップされてきます。過去に出会った人、その人の言葉、ある場面、情景といったものが急に意味をもって、わたしの前に立ち表れるのです。これは鮮烈です。

これはなにもわたしに限ったことではなくて、いつの時代も多くの人が同じような経験しているようで、四月に出た『偶然性と運命』（木田元　岩波新書）は、それをよくよく分らせてくれる本でした。読んだら、たぶん頷く箇所が多いと思います。

鮮烈な「過去」の浮上。「現在」の原点が、「過去」にあって、その「過去」こそが「現在」につながる行動を起して、その行動が「過去」の再認識をもたらす。そして「未来」は「過去」をよりよく生きる出発点となる。そういうことを今、感じています。その出発を飾るのがこの冊子といえるでしょうか。別に冊子にまとめなくてもいいのすが、それが自分を生きようとする人間の自然な発露だと思います。芸術家ならそれが作品になるところですが、残念ながら、稚拙な文章にまとめるのが堰の山です。同時に、鮮烈に立ち表れた「過去」の中心に、十代の半ばに出会った恩師がいて、その恩師に、今のわたしのあり様を伝えたるためにも、これをまとめようと思ったのです。

寺子屋的な塾を営む恩師の精神は、恩師が子供たちに用意している「教養必読書」一覧集と、そこに添えられている言葉に象徴されています。芥川龍之介から始まり、ワイルドまで、文庫で買える７２７冊の書名と出版社名が並んでこの集の扉には、**『《学ぶ》ということは自分を知ることであり、《教える》ということは、絶えず自己を越えていくことにある』。**そしてその扉を開けると空白の用紙の中央に、銘として、**『「教えるとは」　希望をともに語ること　「学ぶとは」　誠実を胸に刻むこと』（スト**ラスブール大学の歌）とワープロ打ちされています。

厳しく近寄りがたいほどだけど、生き方として人間への深い愛情と希望をもっている。恩師から甘い言葉は直接聞いたことがない。耳さわりのよい言葉が愛情の表れとは感じないことは、もともと親の教育もそうであったけど、この時代に養われたのでしょう。４年前のある日、友人と一緒に恩師宅を訪ねたことがあります。帰り道、友人が言いました。「リーさんの原点を見た」。

恩師と他の先生たちが、教える姿勢について交わす激しい議論の光景、不義理をしても再び来る者には以前と変わらず接する態度、家全体解放されているような学習の環境、定期的に行われる読書会、演劇鑑賞。その他どれもこれも、今から思えば、いかにまれな環境であったかがわかる。いえ、今までもわかっていたのですが、その価値をちゃんと認識できなかった。京都散歩を楽しむのも、堀田善衛に親しむのも、書くことを発露にするのも、さらにはパーソナル・アシスタントというやり方を発想したのも、原点はここにあった。そう思います。

記憶の情景

夏の日の縁側

小学校３、４年の夏休み。もうプールから帰った後だったか。家の小さな庭。一畳ほどの縁台にあお向けに寝そべっていた。空は青かった。雲が静かに流れていた。夏の風がふいていた。陽の匂いがした。ぼーと雲の流れを見ていた。そのうち飽きて、うつ伏せになって地面を見た。見ていると、蟻たちがどこに落ちていたのか、キャラメルのかけらを、大挙して、運んでいた。その様子を見ていると、蟻たちも生活があるのだと、わかったような気分になった。

夜道と星とハイヒール

家の靴箱には、黒、白、キャメルの父の大きな革靴が上下に並んでいた。オーダーメイドのそれらの靴には金具が付いていた。時々取り出して、履いた。玄関のコンクリートの地面によく響いた。皮底の地面にすれる、キュッキュッという鈍い音と、金具のカーンという音が。

ある夜、近所までおつかいを頼まれた。通りに人は歩いていなかった。夜空に星があった。静かだった。夜空の星を見ながら、

一人の世界のように感じた。運動靴のつま先を立てた。皮底のような音がした。すましてハイヒールを履いているように歩いた。歩きながら、そうしている自分が、大人びているのでなく、大人のように感じた。

竿竹うり

夏休みの午後。いとこが遊びにきていた。玄関先で遊んでいた。しばらくすると竿竹うりの声がして、そのうち玄関前を通りすぎていった。いとこが表に出た。竿竹うりのおじさんの背に、声色を真似た。一緒に真似た。ずいぶん先に言ったおじさんがふりむき、「親はどんな教育をしているんだ」と腹立たしく、言い放って、先へ先へ進んで行った。呆然と見送った。《たしかに、そうだ…》。子供心に、情けなく、恥ずかしかった。

原点の原点を考える時、右の３つの情景をよく思い出します。ただそれだけですが。

第三章　「未来」

〈文化の続き〉日本の潜在力とこれから

「現在」でも書きましたが、わたしにとっての文化の違いの発見はなかなか衝撃的なものでした。視界が開けた感じがしたものです。ずいぶん葛藤はありましたが、諦めのようなものを持てたものはさいわいでした。ところで、諦め、諦観というのは、けっして投げやりなものではなく、新しいスタートの踏み台になるものだと思います。ネガティブでなく、ポジティブな心の、精神の働きです。

視界がひらけて、あらためて自分のまわりの人々や社会をみると、日本人を表する時によく使われる「ホンネとタテマエが強い」ということが、ちょっと意味を変えて、社会全体にもあてはまると言えるのではないかと思いました。どういうことかというと、たしかに、世間と《同じ》を良しとして、突出しないように生きている人は多いかもしれない。また、突出すると排除されるのが日本社会と感じているかもしれません。でも自分の身近な人たちには世間とか《同じ》をよしとする考えとは一線を画して生きているような人が多い。こう言うと必ず、「それは《類は友を呼ぶ》から」という反応が返ってきますが、そうとばかりは思えません。《変わっている》のかもしれないけれど、独自の道を歩きながら、（ここが大事ですが）、自分さえよければいいという生き方ではなく、誰かのためになるようなことをしている人が多い。そういう人たちが、身近に、そして、たまにメディアを通じても、《こういう人がいるんだ》と思うような人たちが紹介されることがあります。

「世の中を本当に動かしているのは、《いい人》。そうでなければ、世の中はもっと悪くなっている。だから《いい人》を増やしていきましょう」。

いつか恩師が言った言葉です。《うん、たしかに、そう》と思う《いい人たち》がたくさんいる。

《いい人たち》と言っても、「お人よし」という意味ではありません ね。社会はそう簡単には動きませんから、孤独なたたかいの連続でしょうし、そのたたかいが効を奏すためには、知識と知恵を身につけなければいけないでしょうから。つまり、自分とのたたかいということです。もちろん、そのたたかいがいつまでも孤独なものであったら、社会を動かす力にはなりません。むしろ偏狭さを問われます。そうなると、世の中を動かすよりも、閉塞をまねく。そういうことへの感性を育てることも、自分とのたたかいの一つといえそうです。でも、たぶん、たたかいの中で、経験と学習から、たたかい方が洗練されていき、周辺の理解と共感をさそって、世の中を動かす力になるのだろうと思います。根本は変わらないけど、やり方は変わる。「変わらないから、変わる」ということですね。

ところで、よくよく日本の社会を観るところ、というより、わたしの感じるところ、《いい人たち》の多くは、社会に目を向け、社会に良いと思うことを、あえて、声を大にせず、行動は目立たないように、共感できる限られた人たちの範囲で、活動している。そういう人たちの小さな社

会、コミュニティーが、日本のいろんなところに、距離を超え、場を超え、存在する。だから、とことんダメになって初めて底力が出るというのも、普段に突出するとつぶされるから出ないだけで、イザという時には、「しかたない、ここらで表に出るとしようか」というぐらい、平素に十分蓄えられている能力なのだと思うわけです。日本の潜在力の高さを物語っています。

じゃ、その潜在力を最大限引き出すために、≪いい人≫たちのコミュニティーを連携させればいいかというと、それは違うと思います。あえて連携する必要はない。そうなると、目立ってしまって、本来の目的が損なわれる可能性がある。むしろ、それぞれが自分たちの目指すことを実践すること自体が社会のよいネットをはいめぐらせていることになる。日本の文化、風土からすれば、それがふさわしいのではないかと思います。互いにコミュニケーションはとっていなくても、同じような志で活動している人がどこかにいる。「人間は超えることができる」のですから。

ただ、日本の潜在能力の話も、これからの日本にはあてはまらなくなるのではないかと思います。社会の構造の変化が意識の変化につながり、また知的水準というか、社会の善悪に関する基本的なモノサシ、常識といったものが、測れなくなっているのではないかと感じるのです。ということは≪いい人≫たちの考えや行動を共感はできなくても、良いということはわかるとか、同じようなことはできないけど、応援はできるとか、そういう人が少なくなり、≪いい人≫たちが孤立していくのではないかと予測するのです。そういう社会を想像すると、寒々とします。当然日本の潜在能

力の低下にもつながますし。

じゃ、どうすればいいか。自分の問題として、そう、問わざるを得ないのです。こういうことを考えているわたし自身が、わたし自身の生活圏で何か行動する。そういうことになります。これまでも書いてきたように、自分の考えは伝えるというのはわたしの基本的なスタイル。それを「現在」までは、自分にとっては当たり前のことなので、あまり意識していなかったった。しかし「現在」の間に、その意味を感じた。だから、社会人の一人として、若い人たちに対しては一人の大人として、言葉にするということ、「発語」を、わたしの生活圏で意識して行う。それを自分の役割の一つとする。そう考えています。

資格柄、人に教える機会がありますが、そういう場でトピックを聞くなどして、それをきっかけに積極的に議論をしかけます。専門学校で教えた時には、学生たちは面食らっていました。聞くところ、ほとんどの学生は中学、高校のホームルームの時間でさえ、先生の指示のままで、自分たちで考えたり、発言したりすることはなかったそうですから。だから学生たちが反発するかというと、そうでもありません。本当に嫌がるのはわずかで、ほとんどは≪ま、いいか≫、そして、必ず2、3人は、わたしの方が感心させられる学生たちがいます。10代は、未熟かもしれないけど、純粋にものごとを見ているのですね。

1997年の10月頃のあるクラス

マーケティングの授業のプロローグとして、キーワードテストをした。経営資源、組織、管理など、経営やマーケティングのよく出る言葉にまず共通の理解をもつねらいとして。初めて見る言葉に、どれも書けないとほとんどの学生が言うが、とにかく、自分の考えるところを、自分の言葉で書くようにいうと、意外と素直に取組む。一生懸命考える。たまに考えるヒントを与える。キーワードの中にマズローの人間の欲求５段階説」を入れた。ある学生が、一番高い欲求について、ヒントを求めてきた。彼はこう言った。

「先生、その一番上の欲求は、それを持っていない人には、わからないものですか？」

こういう質問がでることに驚きました。この学生だけでなく、大いなる可能性を感じさせる人たちも少なくありません。中学、高校と、彼らが、コミュニケーションする、つまりは、考える機会をあまり持てなかったというのは、社会の仕組みの、教育の制度の、大人の未熟を感じるところです。

同じ大人に向かっては、多くは診断士の講座のようにある一定の枠にはまった機会ですので積極的に議論をしかけることはできませんが、九九年四月に国の緊急対策で生まれた労働省の再雇用プログラムの、マーケティング講座を担当した時には、講師にクラスの運営が一任されたこともあり、なおかつ、まったく自由な立場で参加する受講生たち同士のコミュニケーションを活発にするためにも、「なんか、トピックスはないですか？」を、いつも講座の切り出しにして、今年の４月までの間に７クラス延べ１２０人ぐらいの人たちと、多くは年上の男性たちとずいぶん様々なテーマを話し合ってきました。中には、がっかりするような意見（男女の能力差について）を言う人がいて、世代の呪縛から逃れられない、それに気づかない人がいるものだと思ったものです。当然、こちらはまた意見を返すのですから、そういうやりとり自体が、彼には生意気な映ったのかもしれません、今から思うと。

ともあれ、「未来」にも世の中を本当に動かすのが、《いい人》たちであるよう、わたし自身は意識して言葉を発し、外に働きかける行動を続けていきます。

「過去」の未来化

社会との関係の中では、《いい人》たちを間接的に応援できるよう、自分の生活圏で、感じるところを普通に言葉にして、他者に働きかけていくとして、その働きかけが効を奏するようなものにするためには、自分の知性と感性をふくらませていかなければならないということになります。じゃ、どういう風にして、と思うところですが、“節目”を経験して際立ち、立ち表れた原点を膨らませていくということに、自然に思いが至ります。

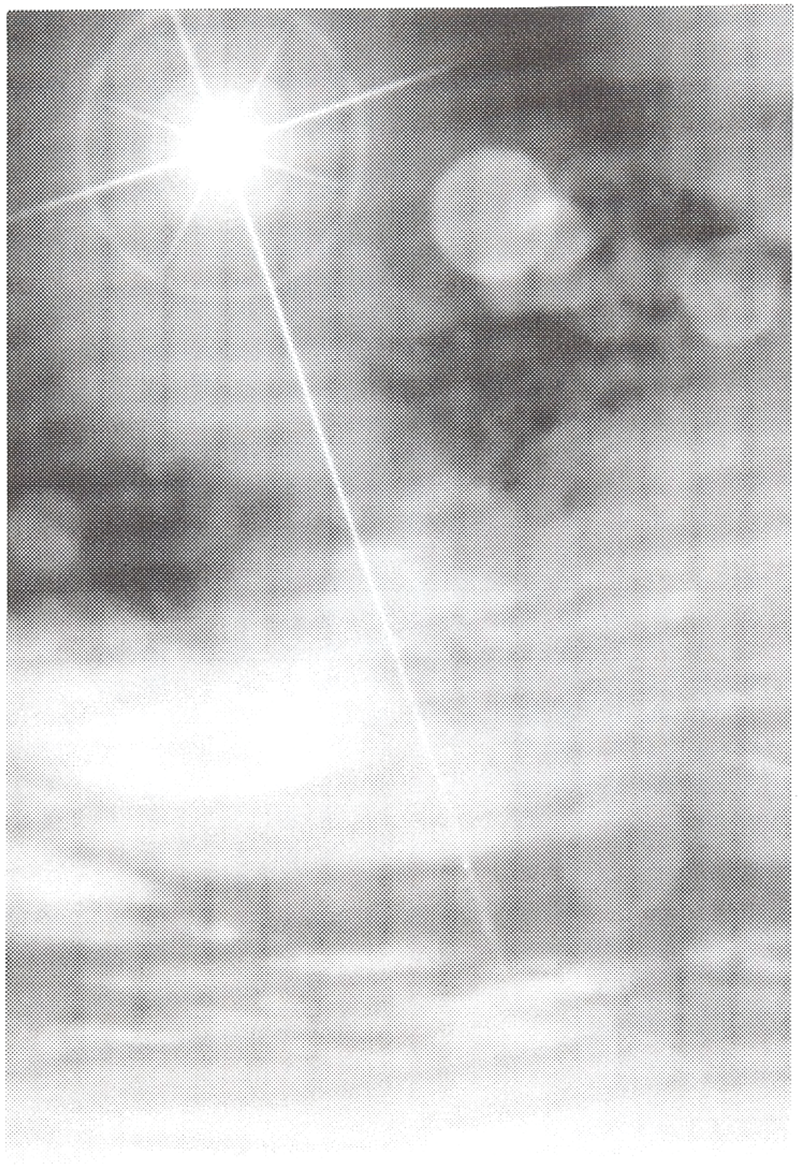
『旅は終わりに近づいて』の後、不思議なことがありました。ある時ふと、関心と感覚が学生の頃のものに戻ったのです。妙な感じでした。そしてこの頃では、思春期の頃の自分自身が、若さゆえと思っていたような、さまざまな行動が、やはり誰でもないわたし自身であることを認識するのです。例えば、一人で京都のお寺へ出かけ、そこで何か感じることをノートに書いたり、詩にしたり。つい最近、“そういえば「ユリイカ」を買って読んでいたなあ”と思い出しました。そんなこともすっかり忘れていたのに。

今こうして書きながら、Xさんが、「その時々、自分の思うようにやっていったらいい」と言ったのは、このことなのかと思っています。先の目標へひとつ飛びしようと思っても、それは無理。目の前の目標に取組んでいけば、おのずと、先の目標に至る。そういうことがわかっているから言

えた言葉かと思います。そういえば、ミンスキーも『心の社会』（産業図書）の中で書いていました。「高度な目標は、もっと単純な目標を達成するための副次的な目標、つまり副目標として、自然に発達する。」

正直なところ、「過去」が「現在」に発見されて、「未来」にどのように鍛えられるか、まだ想像がつきません。このまとめがそのスタートを飾るのは間違いありませんが、「過去」の未来化の生態が、想像つかないというのも楽しみです。

終章　豊かさ



知の周縁

今年も年始のごあいさつはリーズレターに代えました。その一面は、次のように書きました。

二〇〇一年一月レターの一面

二一世紀のはじまりを京都でむかえました。京都では、大晦日の夜から、二一世紀幕開け事業『京都二一』が実施されました。歴史上初大晦日のすべてそろった五山の送り火をはじめ、“京都だからできること”が実現しました。

二一世紀をむかえて地球上のわたしたちは、豊かな生活の意味をもう一度考え、それをかたちにしていこうとする姿がますます求められそうですね。その、考えて、かたちにしていこうとする時にまた、わたしたちはお互いを助け合うのだろうと思います。お互いの豊かな生活を、お互いが支え合っている。そういうことを意識することが、これからは大切なようです。

そういう意識が織り成す二一世紀が豊かな世紀になることを祈ります。

すてきな二一世紀のはじまりを。

このレターで、豊かな生活にふれていますが、1月の段階では、それほど、豊かさについて考えていたわけではありません。ただ、このまとめを書こうと思い始めた昨年末から、そのためにもライフスタイルを変えなければと思いました。これまでよりも少し本を読み始めて、また、学生の頃のように京都へ行く機会を増やし、散歩してはあれこれ考えをめぐらし、日常に感じたことをホームページに書き、そして関係を築いてきた人たちと哲樂をして、またふたたび自分を発見する。そういう日々を今年の初めてから重ねてきて、ある時ふと表れた気分が、ふくふくとした充足感、《豊かさ》という言葉があてはまるようなものだったのです。《豊かさ》というのは、知の周縁から感じられるものなのでしょうか。

とすると、《豊かさ》というのは、モノそのものからではなくて、モノにこめられた意味を通して、あるいはモノをほんの小道具として、人や出来事、風景などに出会い、知性と感性を働かせる、あるいは膨らませるという過程から生まれてくるといえるのですね。今ごろそんなことがわかったのかと言われそうですが、いつも「遅れ馳せながら」です。

「知性のむこうに感性がある」。恩師が語った言葉です。一緒に行った友人に話しているのを、少し離れたところにいて、恩師が発したこの言葉を聞いて、《うん？》とわたしのアンテナにひっかかりました。《なるほどそうだ》。人によって、好み、関心事、ものごとの解釈や同じ話を聞いても、感じる箇所や受け止め方が変わることの理由がすごくわかった気がしたのです。

「知性」はけっして知識の量ではありませんね。五感を通じて取り入れ

た情報、その蓄積に価値基準をあて、個人的評価を定めるまでの思考過程。「感性」は、その感覚的認知または受容といえるのではないかと思います。だから「感性」を磨くということは、「知性」を鍛え、育てることではないかと思います。「感性」は教えることはできない。「知性」なら、価値基準を教えることで、手助けができる。そういう手助けを受けてきて、今のわたしがある。このことを心にとめ、これからの「未来」を歩いていきたいと思います。

おわりに

この『哲樂の中庭』は、追ってまとめていくつもりの『パーソナル・アシスタントというやり方』（仮）と合わせ、「未来」をよりよく、豊かに、一人の独自性をもった人間として社会の中で生きていくため、自分に課した仕事です。

そのきっかけは、これもまた人が発したある言葉でした。5年来、診断士の仕事でつきあいのある知人が、「リーさんのやっていることがよくわからないから…」と、別な仕事仲間にうまく説明ができなかったというのです。これはショックでした。パーソナル・アシスタントの仕事も、リーズサロンや『哲樂の中庭』のアプローチも、まったく交流のない人ならともかく、この知人に伝わっていなかったのには、自分で自分が嫌になりました。「未来」の初めの部分でも書きましたが、ある種の諦めをもつことができたにしろ、だからといって、妙にものわかりがよくなってもだめですね。あらためて自分の未熟さを感じたのでした。二〇〇〇年十一月初旬のことです。

それ以降、一ヶ月ほど、頭の中は、《このままではだめだ、一度ちゃんと考えをもとめないと…》。そう思いながらも、《しんどいなあ、別にいいんじゃないか、そんなことしなくても》とも考えた。でもそれをやるか、やらないかの差は、確実にわたしの将来像の差になって表れる。それが想像できるわけです。やはり、やるべき。そう思ってから、どれほど書

き方に迷ったか。いっときは第三者の語りとして書くことも考えましたが、ちょっと姑息な気がしてやめました。最終的には、やはり自分の言葉で書くことにして、2週間ほどで書きました。

ここで突拍子もない話ですが、結婚式というのは、あれは本人たちのためのものではなくて、本人たちを育ててきた人たちに、「ようやく、ここまで大きくなったか…」と思う場面をつくるというものだと思っています。幸か不幸か、わたしにはその機会がなかった。せめて、この冊子がその機会になればと思っています。わたしをこれまでずっと見守り、これから見守ってくれる人たちに、「ま、がんばっているじゃないか」という思いをもってもらえれば、うれしい。そう思っています。

それにしても、文章というのは恐ろしいもので、書いたものに、その人の知性、感性、そして品性がでます。人格が表れるはずです。でもその表れがが、人との出会いと関係、そして信頼を生むことにつながるでしょうから、モンテーニュに励まされて、わたしもわたしの試し（エセー）を、これからも続けていこうと思います。

さて、ずいぶん長いおしゃべりをしました。そろそろ、中庭を出ましょうか。

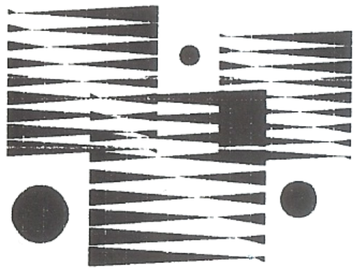
二〇〇一年七月　オフィスの中庭で、夏の風にふかれながら

リー・ヤマネ・清実

リー・ヤマネ・清実

旅は終わりに近づいて

リーズレター１９９９年６月号より



LEE'S

先日ふと、《旅が終わりに近づいて…》という言葉が意識にのぼりました。

《自分を知る旅は終わろうとしている…》

それは突然でした。ただ、漠然とはわかっていたと思います。それがハッキリと「ひとつの区切り」として感じることができたのです。その数日前に読み終えた本があります。一昨年のその時期から読み始めた分野の流れをくむ本です。そして、《結局のところ、いままでの考え方、感じ方でいいんだ…》ということを確認する結果になりました。その本を読むまでに徐々にその確認作業は進んでいました。そしてすでにその上にたって歩き始めていました。そのことをハッキリ気づいたのです。この気づきが「区切り」を実感させ、「旅」という言葉に集約されました。

本当にいい「旅」でした。この旅を支えてくれたのは、もちろん人です。直接あるいは本などの間接的な出会いをとおした人の知性であり、感性でした。

９６年の８月頃、『心とコンピュータ』（発行ジャストシステム）を図書館で見つけました。第一線の研究者らが講師となって開催された子供対象のサマースクールを記録したこの本に脳型コンピュータを研究している［松本元］の項がありました。

松本元（もつもと　げん）
東京大学理学部物理学科卒業、東京大学理学部助手を経て、通産省電子技術総合研究所入所、１９４０年東京生まれ。

自分を知るためのひとつのツールを得た思いがしました。ひとつのきっかけでした。それから2，3ヶ月後ぐらいでしょうか、仕事を通じて出会った二人は、わたしのこの旅を決定づける人たちでした。仕事そっちのけでいろんな話をしているうちに、［松本元］を話すことになりました。すると、「それなら［佐伯胖］を読めばいい。それと［ミンスキー］がいいんじゃないか。『心の社会』（産業図書）は合うと思う」。

図書館には両方の本がありました。“佐伯胖”の『〈わかる〉ということの意味』（岩波書店）という本があり、読みました。子供たちの教育問題をとりあげながら、くわかる>ということはどういうことかを、それこそわかりやすく書かれています。《なるほど…》と納得し、次に分厚い『心の社会』を借りました。〈目から鱗〉とはあのことです。いわばバイブルになるだろうと、この本を買いました。それにしても感心したのは、この本が合うだろうと言ったその人の目です。その知性と感性です。この方からさらに〈アフォーダンス〉という言葉を聞いたのです。９６年の暮れでした。

《アフォーダンス…》とどこか耳にこびりついていた言葉を日経新聞に見つけたのは、それから数日後です。やさしい経済学の連載「複雑系からみた経済」でした。とりあえず新聞を切り抜いたものの、〈アフォーダンス〉にピンときませんでした。

そして年が明けて、９７年は年初めから仕事でバタバタしていまし

佐伯胖（さえき　ゆたか）
慶応大学工学部管理工学科卒業、ワシントン大学大学院心理学専攻、東京大学教育学部教授（学習開発学）。日本における認知科学「革命」の主導者との評。

た。忙しいというのは外界との接点が多くなるということです。それだけ多くの発見がありました。もちろんそれは自分なりの発見です。そのことがこのコーナーにつながったわけですが。

そんな時、ひとつの案内記事を日経新聞に見つけ、驚きました。〈松本元〉と〈ミンスキー〉が参加するシンポジウムが開催されるというのです。日本機械学会創立１００周年記念「ロボットと未来社会」（１９９７年８月４日～５日東京国際フォーラムにて）です。参加を申し込んだところ、参加証が届きました。

この時外国語を学ぶ意義を本当に痛感しました。〈ミンスキー〉はちょっと他のパネリストたちと違っていて、会場内をうろうろしているのです。すぐ側にいるのに、話すことを迷います。意を決し、「握手をしてくれますか」と声をかけると快く応じてくれました。いろいろ話したいことはあるのに、それができない。やっと『心の社会』に感動したことを伝えました。その後が続きません。『心の社会』を教えてくれた人は〈ミンスキー〉のもとで学んでいますから、その彼を憶えているかと聞くぐらいでした。嬉しくもあり、苦くもある東京行きでしたが、ひとりの人との出会いが、自分をその場に運んだことを思うと、人の出会いと共感からわたしたちは、将来の糧につながる何かを得ていると再認識したのです。

そんな思いを強くてして、年は明け、９８年の２月ごろでしょうか、ある日曜の午後、本屋さんをぶらぶらしていて、ずいぶん迷った末に一冊

マーヴィン・ミンスキー
ハーヴァード大学物理学専攻したが、同時に生物学、心理学、神経科学、数学に興味をもち、数学科に転じて同学科卒業。MIT 人工知能研究所の創立者。米国舞踏研究所など多くの組織のアドバイザーも行ってきた。関心は多岐。１９２７年ニューヨーク生まれ。

の本を買いました。『免疫ネットワークの時代』（ＮＨＫブックス）です。読み始めて著者にすごく共感しました。〈人はメディア〉という言葉に、自分自身が表現したかったことが、こんなに簡単な言葉で表されていることに軽いショックを受けました。そしてさらに驚いたのは、この本に〈アフォーダンス〉が出てきたのです。このあたりのことは昨年のレーに書いていますが、そう、日経新聞の連載と、この本の著者が同じだったのです。【西山賢一】です。

にわかに〈アフォーダンス〉が気になりました。そうこう思っている時に図書館で『複雑性としての身体－脳・快楽・五感』（ＴＡＳＣたばこ総合センター『談』編集部・河出書房新社）という本が目にとまりました。借りて帰ってから見つけたのです、〈アフォーダンス〉を。

〈アフォーダンス〉はアメリカの知覚心理学者・ギブソン（１９０４～１９７９）によって生まれた理論です。【佐々木正人】がそれを紹介しています。

【〈アフォーダンス〉は動物にとって環境にある意味。〈アフォーダンス〉は物理的でもあり、心理的でもあり、あるいはそのどちらでもない。動物にとってこの環境には〈アフォーダンス〉だけが存在する。〈アフォーダンス〉はそれぞれの「ライフ」が発見した環境の意味。環境に探されるのは〈アフォーダンス〉であ

西山賢一（にしやま　けんいち）
京都大学大学院理学研究科博士課程修了、埼玉大学経済学部教授。１９４３年新潟生まれ。

り、〈アフォーダンス〉を具現するのは動物であり、〈アフォーダンス〉は固体を超え、潜在する意味としてわたしたちの周囲にある。】

これは非常に夢のある話ではありませんか。環境の中に可能性は存在している。ただ、それを自分が見つければいいんだ。そう思うと希望がわいてきます。これは昨年のちょうど今ごろです。全体の中での自分の存在というものが最高潮に際立った時期でもあり、大いに思考の助けになりました。そういったことが変化を生んで、年末のオフィスの移転から今年につながったのです。

すでにこのあたりから「旅」の終わりは近づいていたのでしょう。というのも、今の自分をいかす、何か新しい知識を学ぼうという気持ちになっていたからです。例えばそれは、『商法』であり、『都市・地域経営』であり、『美と詩の哲学』の選択でした。

けっして目には見えない内なるものが、まるで、形をもつような感覚に徐々になってきていました。ただ、その中身はこれまでのものと変わらないものです。変わらないけれど、形を意識させるという点で大きな変化です。確実に確固たるものになっていく、そんなイメージをもちだしていました。

そんな思いから、【西山賢一】がホームページを通じて紹介している本の一冊をひろい、買ったのが、下條信輔『〈意識〉とは何だろうか―脳の「来歴」、知覚の錯誤―』（講談社現代新書）です。この本にも〈アフォーダンス〉が登場するのですが、それ以上に、著者が「来歴」にこめた意味にあまりに実感がもてたものですから、この言葉を生み出した著者をうらめしく思ったくらいです。【西山賢一】の〈人はメディア〉と同様の感動です。

この本を読み終えて、《はて、いったいこれはどう考えればいいんだ…》。《いろんな人たちが「人間」について研究している。「人間」、それはわたしでもあった。彼らが提示するから「人間」がいるのではなくて、「人間」がいるから明らかにする使命がうまれる。結局のところごく普通に生きているではないか、わたしは…》。5月の中旬頃のことです。

まさに〈意識の周辺〉にそんな思いがじわっと漂っていました。それからしばらくたったある土曜日、図書館をぶらっとしていたら、渡部信一『鉄腕アトムと晋平君』（ミネルヴァ書房）が目にとまりました。障害教育にたずさわる著者が、自閉症の晋平君、そのお母さんと出会って、自問を解くきっかけと、そこにロボット開発分野の研究成果を援用して、求めるものを追求していこうとする著者自身の切磋琢磨が浮かんでくる本でした。

そこに何か同じような姿をみました。そしてこの本の中で著者が「眼から鱗」と書いていた本、黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢を見たか・人

佐々木正人（ささき　まさと）
東京大学大学院教育学部研究科助教授（生態心理学）、１９５２年生まれ。

下條信輔（しもじょう　しんすけ）
MIT 心理学科修了、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了、スミス・ケトルウェル視覚研究所研究員、東京大学教養学部助教授を経て、MIT 生物学科教授。

工知能の哲学』（哲学書房１９８７年）を読んでみようと思いました。ただ、この本は図書館になく、その続編ともいうべき『哲学者クロサキの憂鬱ーとなりのアンドロイドー』（ＮＨＫ出版１９９８年）を読み、ここにきて、何か次の段階に入ったような気がしたのです。《旅はそろそろ終わりに近づいている…》、ふとそんな言葉が頭に浮かびました。

旅…、そう旅だったんだ…。

あらためて手元にある本をとりあげました。渡邊二郎『美と詩の哲学』（放送大学教材）をちゃんと読もう。そう思い読み出して、自分自身の抱えているテーマは古代から人間が追求しているものであることが、その格調高い記述とあいまって、何か安堵したのでした。いよいよこれまでの「旅」は終わりを遂げたと実感しました。そして、新しい「旅」が始まるのです。

この「旅」はどのぐらいになったでしょうか、まる3年、そうですね。何か機が熟したり、自分のものにするのに要する時間はだいたい3年といわれます。こう振り返ってみて、この「旅」を始めるのに、大きなヒントを与えてくれた人、旅の途中を支えてくれた人たちに恵まれたことに感謝しなければなりません。わたしもまた誰かの支えになれたのだとしたら、これらの支えがあったからです。「旅」の終わりを予感し始めた4月の中旬、「旅」の出発点で大きなヒントを与えてくれた人に再び会いました。特に用事があるわけではない。でも、会って話したい、話したほうがいいと感じたのです。そんな思いをうけとめ、まるでこちらの意識を引き出すように、話に同意したり、厳しい指摘を与えてくれました。

誰にもいつかは訪れるであろう、この「旅」。すでにその「旅」を終えた人もいるでしょう。今後のいつか、その「旅」を始める人もいるでしょう。すべての人がそれを支えられるわけではないけれど、必ずあなたを支える人がいる。もちろんわたしもその一人でありたいと思っています。

１９９９年６月５日
リー・ヤマネ・清実

渡部信一（わたべ　しんいち）
東北大学教育学部人間発達臨床科学講座助教授、１９５７年生まれ

黒崎政男（くろさき　まさお）
東京大学文学部哲学科卒業、同大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程修了、東京女子大学文理学部哲学科助教授。カント哲学者であり、認知科学の研究者、１９５４年生まれ。

リー・ヤマネ・清実（ﾘｰ･ﾔﾏﾈ･ｷﾖﾐ）

パーソナル・アシスタント・ギャラリーLEE'S　代表
中小企業診断士
E-mail:paglees@mbox.inet-osaka.or.jp

１９９１年３月、「パーソナル・アシスタント」業を開始。「パーソナル・アシスタント」は独自のコンセプト。コンサルティングの“メニュー”ではなく、“サービスの提供の仕方”に軸をおいた業称。１９９５年４月、心斎橋に事務所開設。（９８年１２月閉所）。９６年４月診断士登録。２００１年１月、リースタの移転先に事務所を開設。現在、出版社の経営者のパーソナル・アシスタントを中心に、教育・研修講師、グループによる企業コンサルティングに加え、公私に出会った人びとのパーソナル・アシスタントでもあろうと、サロン開催による情報交流、HP による情報発信、面談による各種相談の受け付けなども行っている。

哲樂の中庭　てつがくのなかにわ
出会いと対話がひらいた…

2001 年 7 月 30 日発行　¥800（消費税込）

パーソナル・アシスタント・ギャラリーLEE'S

〒531-0071　大阪市北区中津６丁目８－３５
NUMERO Ⅱ-103　TEL. 06-4798-2035

http://home.inet-osaka.or.jp/~paglees/

■ ﾋﾞｼﾞﾈｽ･ｺﾝｻﾙﾃｨﾝｸﾞ＆ｺｰﾃﾞｨﾈｰｼｮﾝ

- 企業家の経営企画支援、プロデュース
- 教育研修（経営管理、マーケティング、コミュニケーション技術、等）
- NP ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ（LEE'S サロン、哲樂の中庭）
- 公共・商業施設ナチュラル・ディスプレイ
- 商業写真&スタジオ

© Lee Yamane Kiyomi 2001